

ライムライム・グリーン

櫻木

SAKURAKI
Miwa

みわ

子どものころ、九州の炭鉱町に住んでいた。私の住んでいた町には書店も図書館もなかったのだが、となり町はすこしだけ栄えていて、本屋にパン屋、ピアノ教室、ソフトクリームを売っているケーキ屋に、生け簀で魚が泳いでいる鮪屋など、いくつかの店が軒を連ねていた。

そんな商店街の一角に、小さなマッサージ指圧院があった。目の見えないご年配の女性が、ひとりで営んでいる店だった。私の母は役場で働いていたのだが、ひとり暮らしのその女性が都会の病院に出かけなければいけないとき、役所の仕事を抜けて、町の駅まで女性を送ってあげていた。

子ども心に、仕事を抜け出して大丈夫なのか？と思ったけれど、「これも公務員の仕事です」と、母は平気な顔なのだった。知人にも見知らぬ人にも、そうした親切を気軽にしていた。

「人に何かしてあげたら、ぱっと忘れてしまうのがいいのよ」ともいった。

「逆に、人から何かしてもらったら、そのことはちゃんと覚えておくのがいいね。人は自分がしてあげたことは覚えて、してもらったことは忘れてしまいがちだけど、その反対がいい」

家族でもない他人が、自分のために何かをしてくれるというのはすごいことなのだ、と母はいった。そうなのかあ、と子どもの時分にもその言葉は印象に残っていたのだけれど、大人になり、わかりあえる人ばかりではないこと、人の世で生きることの大変さを認識するにつれ、他者が自分に思いをかけてくれることのありがたさが、実感として、身に沁みるようになってきた。

そんな経緯もあり、十年ほど前にふと、手帳にしるしを付けておくことを思いついた。予定が書き込めるようになっていく、見開きのマンスリー・ページ。人に助けてもらったり、誰かに思いをかけてもらったときは、その日の日付の数字を、蛍光ペンで塗ってゆく。百円ショップで買った蛍光ペンは、ライムのようなあかるいみどり色だった。

近所の方が、畑で採れた胡瓜きゅうりをくださった。ライムグリーン。読者の方から、素敵なお手紙を頂いた。ライムグリーン。ありがたいなと思うことがあったら、忘れないよう塗ってゆく。このエッセイの依頼を頂いたときも、すぐにその日

の日付をマークした。

十年近くこれが続けてきて気がついたのは、本当にほほまいにち、誰かの厚意ややさしさを受けているということだ。知らない街で道を教えてもらったことで大事な仕事の約束に間に合ったり、辛いときに友だちと電話でお喋りしたことどころが元気になったり。相手にとってはちょっとしたことでも、実はこちらが大いに助けられていた、ということもままあった。

*

次に書く小説で韓国を舞台にしたいと考え、編集者のKさんと一緒に韓国取材に出かけた。いま日本の若い人たちが、*ハルビン*にあこがれて、ソウルに行っている。そのことを通して、日韓のさまざまな世代の人のことを描きたいと考えている。

滞在中は、Kさんや現地の方をはじめ、人に助けてもらうことばかりだったのだが、なかでも忘れがたいのは、北朝鮮との国境にほど近い小さな町を訪ねたときだ。お年寄りのお話を聞きたいとタクシーの運転手さんに相談したら、自分の親戚のおばあさんの家に行ってみようと、連れて行ってくれた。

おばあさんはひとり住まいで、九十歳に近かった。床で寝ていたが、突然の来客をあなたかく迎えてくれた。こちらの質問にたいし、むかしの出来事や思い出をお話ししてくださって

いたのだが、途中で手を伸ばして柵を指し、運転手さんに、いっしょうけんめい何かをいっておられる。運転手さんがほかの人と話しているところうに気がつかないのを悟ると、必死の感で起き上がり、柵から五個入りセットの小さな紙パック飲料を取った。バナナミルクの飲みものだった。ひとつずつ私たちにくれると、満足したようににっこり笑った。

子どもころの学校で、日本語を習ったこと。田舎だったので、戦争が終わったのを知ったのは一年後だったこと。その数年後に朝鮮戦争が始まり、たくさんの人が殺されるのを見たこと。トラックに乗せてもらって、この村にお嫁に来たこと。子どもが産まれたときは、本当にうれしかったこと。そういうことを、ぼつりぼつりとお話ししてくださった。

帰り道、畑の道を歩いていてふと家のほうを振りかえると、おばあさんが家の窓から顔を出し、手を振ってくれていた。私たちの姿が見えなくなるまで、ずっと振ってくれていた。私は目の前の畑の写真を撮った。たくさんの葱坊主が写ったその写真を、スマホの待ち受け画像にしているのだが、気づいたらこれも、ライムグリンの色だった。

(さくらき みわ・作家)

著書に、『ゴックスが燃えている』(集英社、二〇二二)、『カサンドラのティータイム』(朝日新聞出版、二〇二二)など。